テレビドラマは東日本大震災をどう描いてきたか
―津波被災地を舞台とした３作品の分析を中心に―

米 倉　　律*

１．はじめに

2万2千人以上の死者・行方不明者を出した東日本大震災から、まもなく12年になる。この間、テレビは震災および原発事故について膨大な数の番組を放送してきた。番組ジャンル別では、その中心は「ニュース・報道番組」「情報・ワイドショー」である。例えば、2011年3月から10年間でNHK が放送した震災関連番組を放送時間量でみると、「ニュース・報道番組」が62％、「情報・ワイドショー」が8％を占めている。同様に、日本テレビでは「ニュース・報道番組」51％、「情報・ワイドショー」34％であった（谷正名・水原ほか2022：15）。また、ドキュメンタリーも数多く放送されてきた。NHK と民放の代表的な定時のドキュメンタリー枠だけに限定しても、震災から10年のあいだに放送された本数は、『NHK スペシャル』（NHK）207本、『NNN ドキュメント』（日本テレビ系列）114本、『テレメンタリー』（テレビ朝日系列）130本などとなっており、定時枠以外の番組（特番や単発など）を含めるとその数は1000本をゆうに超える（古澤健・米倉律2022：29）。

「ニュース・報道番組」や「ドキュメンタリー」ほどの量はないものの、「フィクション」のジャンルであるテレビドラマにおいても、東日本大震災をテーマとした作品が多く放送されてきた。後述するように、ドラマでは何をもって「震災関連」のドラマとするかの判断が難しいが、震災を間接的に扱ったり、背景として描いたりしているものも含めると、その数は確認できているものだけで68本ある。その中には、社会的に大きな話題となったり、その作品性が高く評価されたりして、放送業界における複数の賞を受賞した作品も多く含まれている。しかし、震災関連の「ニュース・報道番組」や「ドキュメンタリー番組」を対象とした研究が数多く蓄積されてきたのに対して、テレビドラマを対象とした研究は全くといっていいほど実績がない。背景には、震災関連のテレビ番組を扱う研究が、基本的にジャーナリズム研究や災害報道研究として行われてきたことが関わっていると思われる。しかし、震災を扱ったテレビドラマには、ドラマというフィクションであるがゆえに、ニュース・情報番組やドキュメンタリーなどの「ノンフィクション」では不得手とする、親子や夫婦関係のような親密圏における人間関係のありようや、被災地における人々の心の葛藤や変化といった機微を繊細に描いたものが少なくない。そのことによって震災を扱ったテレビドラマは、震災が人々にとってどのような経験だったのか、その後の社会やコミュニティのあり方に何をもたらしたのかといった諸点を考えるうえで、多くの示唆に富む重要なテクストとなっていると言える。

本稿では、震災を直接的にテーマとした3本の代表的なテレビドラマ作品を題材としながら、それらの作品のなかでの震災の表象を比較・分析するとともに、被災の経験や記憶が人々のその後の

*よねくら　りつ　日本大学法学部新聞学科　教授

人生にとってどのような意味を持つものとして描かれているのかを明らかにする。以下では、はじめに震災をテーマとしたテレビドラマについての定義やジャンルを整理し、その放送の状況を概観する（2節）。そして、そのうえで本稿が対象とする3本の選定理由や3本の特徴を説明したうえで（3節）、各作品について幾つかの視点から分析する（4節）。

2.「震災後テレビドラマ」の概況

2−1. 定義

はじめに、震災を扱ったテレビドラマの定義や放送の概況について整理しておきたい。定義については、同じフィクションとして隣接分野とも言える文学での先行研究が参考になる。文学研究の分野においては、震災後に書かれ、震災をテーマにした文学のことが広く「震災後文学」と呼ばれ（木村朗子2013、2018、飯田一史2017）、「震災後文学」の内容・テーマを対象とした研究や評論が活発に展開されてきた（米倉律2022）。文学に倣って本稿では、震災後に放送された、震災をテーマにしたテレビドラマのことを「震災後テレビドラマ」と呼ぶこととしたい。震災後テレビドラマは、これまでに確認できた範囲で68本放送されている。ただし、震災後文学がそうであるように、震災後テレビドラマもその内容やテーマ、形式などにおいて極めて多様である。ここでは便宜的な分類として「震災を直接的なテーマとして扱った作品」「震災を間接的なテーマとして扱った作品」「ドキュメンタリードラマ（再現ドラマ・シミュレーションドラマ）」という3つのカテゴリーに分類し、整理しておきたい。

①震災を直接的なテーマとして扱った作品

第一は、東日本大震災を直接的なテーマとした扱った作品である。本数は39本で全体の半数以上が該当する。ここに分類される作品の殆どは、主要な登場人物が津波や原発事故による被災者、遺族、関係者などである。そして多くが、彼らの受けた被害の実態や復旧・復興が進んでいく被災地の状況を何らかの形で描いている。本稿が分析対象とする3本のドラマ、すなわち『ラジオ』（NHK、2013年3月26日）、『時は立ち止まらない』（テレビ朝日、2014年2月22日）、『小さな神たちの祭り』（東北放送、2019年11月20日）も、この中に分類される。また、『キルトの家』（NHK、2012年1〜2月）や『連続テレビ小説 あまちゃん』（NHK、2013年4〜9月）、『ドラマ10 サイレント・プア』（第8話）（NHK、2014年5月27日）、『連続テレビ小説 おかえりモネ』（NHK、2021年5〜10月）のように、震災が物語の中心的なテーマであるとは必ずしも言えないものの、震災関連の事柄（被災者、被災地）が重要な背景やサブ・テーマであるような作品もある。こうした作品もここでは広い意味で、震災を直接的なテーマとして扱った作品に含めておきたい。

②震災を間接的なテーマとして扱った作品

一方、『ブラックボード』（TBS、2012年4月5〜7日）や『連続ドラマ W マグマ』（WOWOW、2012年6月10日）のように、主要な登場人物や舞台として被災者や被災地が描かれるわけでもなく、震災関係の事柄が直接的または間接的なテーマであるわけでもないが、震災後の社会状況や雰囲気が物語の背景や設定として一定の意味を持っているような作品がある。これらは震災を間接的な

テーマとして扱った作品と見なすことができる。ここに分類される作品数は8本である。ただし、震災が間接的なテーマとして扱われているかどうかの判断基準は必ずしも明確ではなく、震災後の社会状況や雰囲気が何らかの意味を持っているドラマという基準で考えるならば、その数は膨大になる可能性がある。[(1)]

③ドキュメンタリードラマ（再現ドラマ、シミュレーションドラマ）

ドキュメンタリードラマも少なくない。ここには22本が分類される。ドキュメンタリードラマは一般に、「実際に起こった出来事を再現したドラマ」「事実に基づいて作られたドラマ」というほどの意味で用いられる。例えば、『Kesennuma Voices』（TBS、2012年3月12日）は、津波被害にあった宮城県気仙沼市を舞台とし実在の人物を主人公としたドキュメンタリードラマである。[(2)]また、やはり津波で大きな被害が出た石巻市の地元紙をめぐる実話をドラマ化した『3.11 その日、石巻で何が起きたのか～6枚の壁新聞』（日本テレビ、2012年3月6日）[(3)]、東日本大震災後、件数が増えているという離婚をテーマとし、離婚する夫婦の心の機微を描いた『ドキュメンタリードラマ 離婚式 人前でサヨナラを誓う夫婦たち』（NHK・BS プレミアム、2012年3月18日）のような作品もある。

また報道番組やドキュメンタリー番組などの一部分または一コーナーとして、「再現ドラマ」や「シミュレーションドラマ」が用いられていることも少なくない。例えば、「再現ドラマ」では福島第一原発の事故当時の状況を克明にドラマ仕立てで再現したコーナーを含む『金曜スーパープライム 1000年後に残したい…報道映像2011』（日本テレビ、2011年12月23日）がある。シミュレーションドラマでは、首都直下型地震や富士山の大噴火が実際に起こるとどうなるかを描いた部分を含む『NHK スペシャル　MEGAQUAKEII（3）“大変動期”最悪のシナリオに備えろ』などがある。

2－2. 放送の概況

次に震災後テレビドラマの放送の概況を整理しておく。図1は、震災後テレビドラマの放送本数を、年ごとに表示したものである（NHK・民放別）。これをみると、本数が最も多かったのは2012年の13本で、それ以降の年では7～8本という年が多く、徐々に減少してきたことが見て取れる。ただし、ニュース・報道番組や情報番組のような報道系のジャンルに比べると、もともとの放送量（本数）が少ない一方で、減少傾向が顕著とはいえない。一方、表1は、震災後テレビドラマの局（系列）別の放送本数を示したものである。NHK が最も多く32本と、全体の半数近くを占めている。民放のなかでは TBS が最も11本となっている。また地方民放でも5本が制作されている。その中には本稿の分析対象である『小さな神たちの祭り』（東北放送、2019年11月20日）のほか、復興庁の被災者支援総合交付金を活用した東日本大震災復興動画制作プロジェクトの一環として制作された『岩手復興ドラマ 冬のホタル』（IBC 岩手放送、2017年3月18日）、『岩手復興ドラマ 日本一小さな本屋』（岩手めんこいテレビ、2017年3月20日）、また放送後に映画化もされて話題を呼んだ『浜の朝日の嘘つきどもと』（福島中央テレビ、2020年10月30日）のような強い地域色を特徴とした作品が含まれている。

図1. 震災テレビドラマの本数（年別、NHK・民放別）

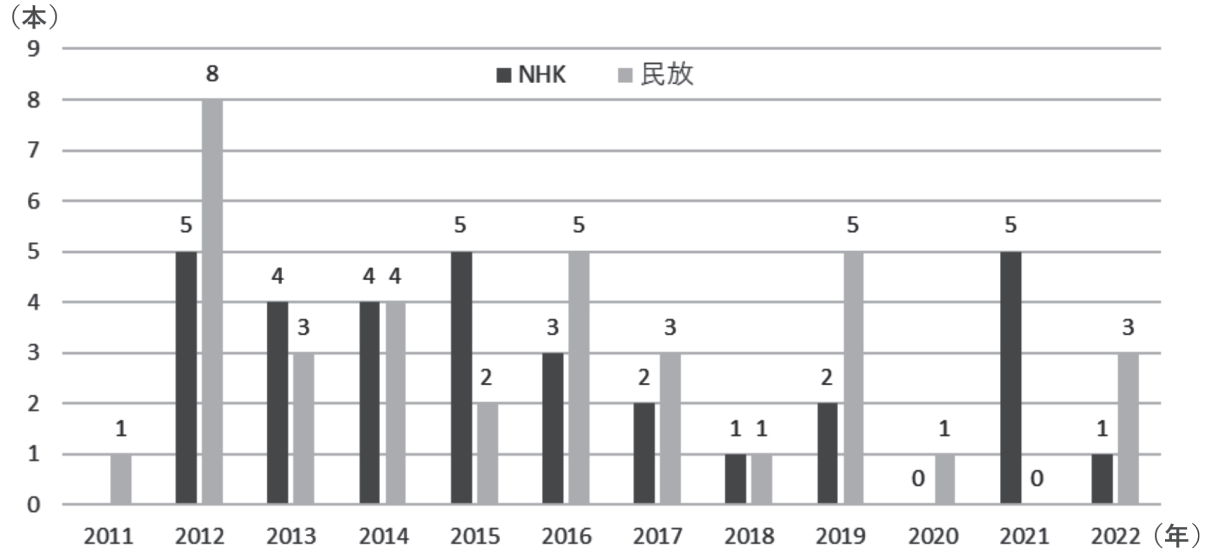

表1. 局（系列）別の本数

局・系列名	本数
NHK（E テレ、BS 含む）	32
日本テレビ系列	5
TBS 系列	11
テレビ朝日系列	3
フジテレビ系列	5
テレビ東京系列	3
地方民放	5
その他（WOWOW など）	4
計	68

3．対象作品

3－1. 津波被害を扱った3作品

本稿では、『特集ドラマ ラジオ』（NHK、2013年3月26日）、『時は立ち止まらない』（テレビ朝日、2014年2月22日）、『小さな神たちの祭り』（東北放送、2019年11月20日）という3本の震災後テレビドラマを分析対象とする。この3作品を対象とした理由は、3作品が、次のような幾つかの共通点と差異を持つことによる。第一に、この3作品には、津波被災地を舞台としていること、被災者、遺族、家族、関係者らが主要登場人物であること、津波被害に伴う喪失からの立ち直りや人間関係・共同体の再生を重要なモチーフにしていること、という共通点がある。第二に、この3作品には、いずれも高い社会的評価を得て国内外の放送関連の賞を数多く受賞した作品であるという共通点もある。『特集ドラマ ラジオ』（NHK）は、第68回文化庁芸術祭「テレビドラマ部門」大賞、第50回

ギャラクシー賞「テレビ部門」優秀賞などを、『時は立ち止まらない』（テレビ朝日）は、2014年東京ドラマアウォード・作品賞・グランプリ（単発ドラマ部門）、第19回アジア・テレビジョン賞2014・最優秀賞（単発ドラマ・テレビ映画番組部門）などを、そして『小さな神たちの祭り』（東北放送）は、2020年日本民間放送連盟「テレビドラマ番組部門」優秀賞、第25回アジアテレビジョンアワード「単発ドラマ・テレビムービー部門」最優秀賞などの各賞を、それぞれ受賞している。[(4)] つまり3作品は、数多く放送されてきた震災後テレビドラマをいわば代表する作品と見做すことができる。第三に、この3作品を制作した放送局はそれぞれ、『ラジオ』がNHK、『時は立ち止まらない』がテレビ朝日、『小さな神たちの祭り』が東北放送である。つまり、公共放送、在京民放キー局、ローカル民放局という、それぞれ運営形態と放送エリアが異なる局によって制作されている。以上のような共通点と差異を有する3作品の作品を対象に分析することによって、震災後テレビドラマが、津波被害とそこからの復旧や復興をどのように描いてきたのか、その傾向や特徴を多様な角度から明らかにすることができると考えられる。

3－2. 3作品の概要

3作品の概要は以下の通りである。

①『特集ドラマ ラジオ』（NHK総合）

放送日：2013年3月26日
放送時間：89分
出演：刈谷友衣子、安藤サクラ、山本浩司、夏居瑠奈、吉田栄作、西田尚美、豊原功補、
　　リリー・フランキーほか
脚本：一色伸幸
演出：岸善幸

（ストーリー）

震災から10か月。仮設住宅に引きこもる女子高生「某ちゃん。」（刈谷友衣子）を心配した兄貴分の蒲鉾店四代目・國枝（吉田栄作）は、半ば強制的に女川さいがいFMに参加させる。しかし、ほとんど何もしゃべれない、何も伝えられない…。落ち込む彼女に、父親（豊原功補）が、「話すのが苦手ならば文字で表現したらいい…」とブログを勧める。彼女は、自分自身の心情を少しずつ綴り始めて行く。そんな某ちゃんが放送で流したロックミュージックを、ネット配信で耳にしたのは、東京で働く飛松（リリー・フランキー）。なぜか心惹かれ…某ちゃんとのメールのやりとりが始まる。さいがいFMの仲間たちにも支えられ、某ちゃんは次第に元気を取り戻し、未来に希望を持ち始めていく。そんな時、瓦礫の受け入れについて書いた某ちゃんのブログが突然炎上する。普段は10人程だった閲覧者が100万人を超える。[(5)]

②『時は立ち止まらない』（テレビ朝日）

放送日：2014年2月22日
放送時間：126分

出演：中井貴一、柳葉敏郎、橋爪功、吉行和子、樋口可南子、黒木メイサ、神木隆之介、
渡辺大、岸本加世子、倍賞美津子ほか
脚本：山田太一
演出：堀川とんこう

（ストーリー）
西郷良介（中井貴一）は東北地方の海辺の町の信用金庫で支店長となり、妻の麻子（樋口可南子）、母・奈美（吉行和子）、市役所に勤務するひとり娘・千晶（黒木メイサ）と共に、海を見下ろす小高い丘にささやかな家を建て、平凡な生活を送っていた。ある休日、良介たちは千晶の恋人・浜口修一（渡辺大）の自宅に、初めての両家顔合わせに向かった。浜口家は代々漁師で、修一の父・克己（柳葉敏郎）、母・正代（岸本加世子）、祖父・吉也（橋爪功）、祖母・いく（倍賞美津子）、弟の光彦（神木隆之介）の6人家族…。千晶は将来、政界で活躍する夢を抱いており、良介と麻子は娘が漁師の家に嫁ぐことに複雑な想いを抱いていたが、それはまた浜口家の面々も同じだった。だが、2人の結婚への意思は固く、両家はそれぞれ子どもたちの結婚を認めることに。しかし、5日後の2011年3月11日、東日本を襲った地震と津波が、2つの家族の運命を大きく変えてしまう。[(6)]

③『小さな神たちの祭り』（東北放送）
放送日：2019年11月20日
放送時間：114分
出演：千葉雄大、土村芳、吉岡秀隆、サンドウィッチマン、笛木優子、細田佳央太、不破万作、
白川和子ほか
脚本：内館牧子

（ストーリー）
家族全員を東日本大震災で失った青年（千葉雄大）。東日本大震災から9年目の今でも、自らの幸せを追い求める事が出来ない。そんな彼の前に一台のタクシーが現れる…。舞台は宮城県南部沿岸の町、亘理（わたり）。主人公（千葉雄大）はイチゴ農家の長男。しかし農家を継ぐ気はなくあの日は東京の大学にいた。そして津波で家族全員が行方不明に。それから8年経った2019年でも葛藤を抱え続け、恋人（土村芳）との関係も危うい。そんな時に彼が遭遇した夢のような出来事とは…。拭い去る事の出来ない思いを抱えながらも、再び前へと進む東北の人々の希望を、ある青年の姿を通して描く。[(7)]

4．分析

以下では、3作品の内容を、①作中の「場所」と「時間」、②主人公にとっての震災、③周囲・コミュニティとの関係、④エンディングという4つの視点から分析する。

4－1.「心の復興」とは――『ラジオ』（NHK、2013年3月26日放送）

①作中の「場所」と「時間」

『ラジオ』（NHK）が放送されたのは、震災から約2年後の2013年3月26日である。舞台は宮城県女川町で、作品のなかでも実名で女川町として登場している。女川町には最大高さ14.8m の津波が押し寄せ、町の住宅の約9割にあたる約3900棟が被害を受けた。女川町は被災市町村のなかでも被災率が最も高かった自治体である。震災前の人口約1万人のうち、死者・行方不明者は829人にのぼった。[8] ドラマのなかでは、津波被害を受けた町の中心部の復旧はほとんど進んでおらず、登場人物の多くは仮設住宅に暮らしている。作品に登場する場所の殆どは女川町内であり、主要な舞台は、主人公たちが活躍する臨時災害 FM 局のほか、町の特産品の蒲鉾を扱う工場・店、仮設住宅などである。女川町以外では、東京が何度か登場する。女川で薬局を営んでいたが被災して家族を失った男（飛松）が孤独な生活を送りながら、女川の FM 局の放送をネット経由で聴いているという設定である。

次に『ラジオ』の物語の構造を時間軸に沿って分析しつつ、そのなかでの震災の位置づけを見て行く。表2に示したように、物語上には2012年1月から2013年3月までのあいだに5つの「時間」が存在しており、それぞれの「時間」が作品の主要なシーケンスに対応している。作品冒頭で、次のようなテロップが表示され、物語が実話に基づいたものであることが説明される。

> 東日本大震災から1か月後　宮城県女川町に臨時災害 FM 放送局がつくられた。スタッフの大半は、ラジオ経験などなかった被災者たち。数人の高校生も参加した。このドラマはいまも放送を続ける女川さいがい FM に参加した一人の女子高生のブログをもとにしている。[9]

物語は、“某”というあだ名で呼ばれる主人公の女子高校生が仮設住宅に引きこもってふさぎ込

表2.『ラジオ』（NHK）の時間軸

物語上の時間	物語上の主な出来事
2012月1月 ↓	・ふさぎ込んで仮設住宅に引きこもっていた主人公の女子高校生“某”が女川さいがい FM に参加 ・某がブログを始める。 ・ブログが反響を呼び、放送に手応えを感じた某が活動にやりがいを見出す
2012年3月 ↓	・津波被災地の瓦礫受け入れをめぐる某のブログの読者が200万人を超えて炎上する →ショックを受けた某は再びふさぎ込む ・東京で暮らす女川出身者（飛松）からのリクエスト曲によって励まされた某は再び FM 局の活動に戻る
2012年7月 ↓	・「取り戻さなければならないもの」は自分自身だと悟った某が、東京の大学に進学する夢をもう一度追いたいと両親に告げる
2012年11月 ↓	・某の希望を聞いてショックを受けた母親を見て、気持ちが揺れ動きながらも、某は最終的に東京の大学に進学する決意を固める
2013年3月	・某が東京へ向けて発つためバス停へ向かう ・バス停で飛松と顔を合わせる ・某を乗せたバスが出発する

んでおり、それを心配した周囲が某を臨時災害FM局の活動に引き入れるところから始まる。某は、FM局の活動に面白さを見出すことによって引きこもり状態から脱していく。そのプロセスが描かれているのが2012年の1月と3月である。そして大学進学という元々の夢を某が取り戻す様子が2012年7月で描かれ、東京の大学に進学するために女川の町を離れる2013年3月の場面で物語は終わる。このように『ラジオ』の物語上の時間は単線的で、震災の瞬間が登場せず、震災から1年弱の時点から始まり、2年後の春へと断続的に流れていくことが特徴である。この時間の流れに沿って、某を中心とした登場人物は、様々な悩みや葛藤を抱えながらも震災や復興と向き合いつつ、少しずつ変化していく様子が描かれているのである。

②主人公にとっての震災

震災では、某の家族に犠牲者は出ていない。しかし両親と暮らしていた家が津波で流され、一家は仮設住宅で暮らしている。また漁師の父親は漁船を失ったため、漁の手伝いをしている。女川さいがいFMで活動する高校生には、両親を失って仮設住宅で祖父と二人暮らしをする少女（岡崎えみ）もいる。彼女からは、近親者を失ったわけでもないのに覇気のない某は「ぜいたく病」だと言われる。作中では、某が震災から1年弱経ってもふさぎ込んでいる理由について明示されてはいない。しかし某を女川さいがいFMの活動に誘った蒲鉾店の経営者（國枝重治）が、自社の隠れたヒット商品である「女川どうしよう」[(10)]を評して言うように、町の8割が流され1年経っても復興の目途の見えない女川は、町全体が「どうしよう」という前途多難な状態が続いている。震災1周年のタイミングでの放送において國枝自らがマイクに向かって語るように、1年経っても町は「満潮になると道路が海になる（冠水する＝筆者注）」状態であり、復興以前に「復旧すら手つかず」の状態である。某は、そうした途方に暮れた町自体とまるでシンクロするような「喪失状態」にあると言える。

③周囲・コミュニティとの関係性

そんな某に大きな変化をもたらすのが女川さいがいFMの活動である。某は高校生スタッフとして同局のアナウンサー役を務めるほか、得意の文章力を発揮して同局のサイトでブログを発信していく。某が女川さいがいFMの活動に積極的に関わるようになったきっかけは、某自らがリクエストしてパンク・ロックバンド、ザ・スターリンの曲「負け犬」を流したところ、女川出身で今は東京で暮らす男・飛松からメッセージが届いたことであった。そのメッセージは「某ちゃんありがとう。今スターリンが流れた3分間だけ、タイムマシンに載って仲間と再会できた。泣いた。音楽を届けてくれてありがとう。東京在住、飛松。」というものであった。ラジオを通じて人が繋がることに感動した某はマイクに向かって次のように語る。

> 失礼しました。このCD、流された、流されちゃった家のがれきからやっと取り戻したものでした。父からもらって、それでパンクやロックが好きになった一枚で何度も聴いて、私にとってもタイムマシンです。聞きながら目を閉じると時間が巻き戻る、音楽のあいだだけあの頃に戻れるんです。私にありがとうってメールをくれた飛松さんに私もありがとうって言いたいです。

『特集ドラマ ラジオ』
（NHK、2013年3月26日）

また、某と女川町との関係をよく表しているのが、瓦礫の受け入れについて東京で反対運動が起きていることに対して某が書いたブログが炎上する一幕である。某はブログで次のように記す。

> 漁師の祖父が建てた立派な我が家は今じゃ更地。祖母の嫁入りの際に持ってきた着物は海でわかめのように漂う。若かりし頃の母の写真から海のにおい。全部瓦礫っていうんだって。全部瓦礫って言われるんだって。町は被災地と呼ばれた。ただの高校生が被災者と呼ばれた。あの子は思い出になった。上を向いて歩こうと見上げる空は虚無の青。ほほを伝う涙なんてとっくの昔に枯れちゃった。瓦礫の受け入れ反対とテレビで見たんだ。昨日までの宝物。今日は汚染物と罵られる。

このように某にとっての震災（津波）は、大切な思い出の詰まった日常生活や愛着のある町を押し流して「瓦礫」「被災者」「被災地」にしてしまい、「宝物」だったはずのものを「汚染物」と忌み嫌われるものに変えてしまった出来事である。そして同時にこのシーンは、被災地と被災地以外との間の大きな温度差を鋭く表現している。某はその大きな温度差の前に無力であり、ブログの炎上をきっかけに再びふさぎ込んでしまう。再び仮設住宅に引きこもっていた某は東京の飛松から「某ちゃんに捧げる」としてリクエストされた「俺たちの応援歌」を聴いて立ち直る。ラジオを通じて町に元気をもたらす活動をしていたはずが、逆にラジオから元気づけられ立ち直るきっかけを得た某は、「取り戻さなければならない」のは自分自身なのだと認識する。女川の町の復興の役に立つには、自分自身が「もっと人に伝わる言葉、もっと強い言葉、もっと優しい言葉」を身につける必要があること、そのためには大学に進学してもっと勉強する必要があると悟ったのである。

④エンディング

『ラジオ』のエンディングは、某が東京の大学に進学するために女川を離れる印象的なシーンである。両親からバス停まで車で送ってもらった某は、バス停で飛松と待ち合わせをしている。東京で一人暮らしをしていた飛松は、故郷の女川でもう一度やり直すため女川に帰ってきたのである。ラジオを通じてお互いに勇気づけ合っていた二人がエールを交換し、某はバスに乗り込み、故郷を後にする。力強い眼差しでまっすぐ前を見つめる某の顔を映し出した映像がラストカットである。

以上のように『ラジオ』は、震災で心に傷を負った女子高校生がラジオを通じた仲間やリスナー

との交流によって自分自身を取り戻し、立ち直っていくという物語である。震災では、直接的・物理的な被害とは別に被災者が受けた心の傷（PTSDや鬱などの精神疾患、生きがいの喪失など）のケアの必要性が指摘されてきた（高塚雄介2012、本多環2016、望月美希2020、前田正治2021など）。そして、被災者の「心の復興」のあり方が様々な形で議論されると共に、その困難さも言われてきた。『ラジオ』は、文化庁芸術祭大賞の受賞理由で指摘されているように、被災地と被災地外との関係を「「絆」などの言葉で単純化しがちなマスメディアの震災報道を批判しつつ、一方的な断罪に終わ」らない形で被災者の「心の復興」のあり方を問いかけるような作品となっている。[11]

4－2. 分断・葛藤と和解――『時は立ちどまらない』（テレビ朝日、2014年2月22日放送）

①作中の「場所」と「時間」

『時は立ち止まらない』（テレビ朝日）は「別浦市」という名の架空の町を舞台としている。作品内では犠牲者数など具体的な情報は示されていないが、この町も津波で甚大な大きな被害を受けている。作品に登場する場所はすべて別浦市内で、作品の主要登場人物である2つの家族（西郷家、浜口家）のメンバーが関わる場所である。具体的には、西郷家の長女・千晶が勤務する市役所や避難所、千晶の父が勤務する地元の信用金庫、そして津波で家を流された浜口家が生活する仮設住宅およびその周辺などが主要な舞台である。

この作品には2011年3月6日から2013年秋までの7つの「時間」が存在している（表3）。物語は、震災の5日前から始まり、先に見た『ラジオ』とは異なって震災の瞬間（当日）も描かれる。そして震災直後（＝3月17日）、震災半年後（＝2011年7月）のシーンがあり、その後、物語の進行とともに、震災から1年弱が経った2011年冬、2012年正月と時間が進んで、エンディングは2013年秋となっている。このように、作品内を流れる時間の長さは、『ラジオ』が1年2か月であるのに対して、この作品では2年半である。ただし、エンディングの2013年秋以外は、2011年3月から翌2012年の正月まで、すなわち震災から1年以内の出来事が描かれている。物語は、直接の津波被害を受けていない西郷家の家族4人と、家を津波で流されて家族3人が犠牲となった浜口家の家族とが、感情的な対立や葛藤を経て和解へといたるというものだが、その一連のプロセスが、発災からエンディングまでの6つの時間（＝シーケンス）で描かれるという構造になっている。なお、この作品も『ラジオ』と同様に、一部の回想シーンを除くと、物語のなかを流れる時間は単線的（一方向的）である。

『時は立ちどまらない』
（テレビ朝日、2014年2月22日）

表3.『時は立ちどまらない』（テレビ朝日）の時間軸

物語上の時間	物語上の主な出来事
2011年3月6日 ↓	・西郷家の娘（千晶）と浜口家の長男（修一）の結婚に向けた初めての顔合わせのために両家のメンバーが浜口家に集まる ・二人の結婚に向けた両家の複雑な思いがあること、両家の父親同士（西郷良介、浜口克己）が中学時代に同級生だったことなどが分かる
2011年3月11日 ↓	・震災が発生 ・西郷家の一家四人は無事だったが、浜口家では祖父、母、長男が津波の犠牲になる
2011年3月17日 ↓	・両家のメンバーが避難所で遭遇する ・浜口家の祖父、吉也が、もう縁を切ろうと言い出す
2011年7月 ↓	・浜口家の暮らす仮設住宅を千晶が訪ね、亡くなった修一の思い出を聞かせて欲しいと訴える ・千晶は自身の修一との思い出も語る ・修一の弟、光彦が千晶に「結婚して欲しい」と言う
2011年冬 ↓	・光彦と千晶が会っていることを気にした西郷家の両親が浜口家の父と三人で相談する。 →三人は光彦と千晶に会って説得し、引き離す →光彦は青森の水産加工場で働き始める
2012年正月 ↓	・西郷家の祖母、奈美が浜口家の祖父、吉也を訪ねる。 →吉也は奈美をハグしたいと言い出す ・西郷麻子が浜口克己を呼び出し、良介の中学時代のことを聞き出す →良介と克己が殴り合ったあと和解する
2013年秋	・克己が吉也に「漁業は止めて大工になる」と言い出し、克己を良介が「信用金庫としてバックアップする」と言う ・孫の光彦が現われ、吉也と一緒に漁業再建をしたいと言う →浜口家の跡に2つの家族のメンバーが集まる

②主人公にとっての震災

『時は立ちどまらない』には特定の主人公はいない。主人公は2つの家族のメンバー全員といっていいい。西郷家の4人（父、母、娘、祖母）、浜口家の震災で生き残った3人（父、祖父、次男）の計7人である。7人にとっての震災は、もちろんそれぞれ異なっている。西郷家の長女・千晶にとっては、浜口家の長男でフィアンセであった修一を津波で奪われた。彼女は、千晶の父・良介は地元の信用金庫の支店長を務めており、震災で甚大な被害を受けた地元の人々の仕事や生活の再建を支えるという役割を担っている。浜口家の3人にとっての震災は、大切な家族3人を失うという悲劇的な体験であり、同時に家と漁師の仕事という生活の手段をも奪われる出来事であった。漁業を生業としていた浜口家の父と祖父は、物語の終盤近くまで仕事を再開しようとする気力も失った状態のままである。

③周囲・コミュニティとの関係性

以上のように、2つの家族のメンバーそれぞれで、震災は異なった意味を持つ体験として描かれている。しかし、それよりも作品内で際立っているのは、震災で直接的な被害を受けなかった西郷家と、大切な3人の家族や家、仕事を奪われた浜口家という2つの家族の置かれた状況の違いである。実際に多くの被災地においてそうであったように、同じ町のなかに住んでいても、津波が到達

したエリアと到達しなかったエリアとでは被害の状況は全く異なる。そうした状況は、震災後の復旧・復興のプロセスにおいて、被災地・被災者のあいだに様々な分断や軋轢を生み出す要因となったことについては、先行研究においても多くの指摘がある（除本理史2015、関嘉寛2016、山崎真帆2020など）。このドラマは、結婚の予定を縁としてつながりを持った2つの家族の姿を通して、被災地域のコミュニティ内においても被災体験には多様な形があり、その体験の差異ゆえに被災者のあいだにも生じる分断や軋轢をどう乗り越えられるのかという問題をテーマにしていると言える。2つの家族のあいだに生じた立場の違いと分断は、例えば、次のシーンに象徴的に表現されている。これは震災の6日後、避難所で遭遇した両家のメンバーが、避難所近くで話し合うシーンである。ここでは、浜口家の祖父・吉也が、西郷家の家族に向かって、両家の関係は結婚の予定があったからこその「縁」だったのであって、（浜口家の長男・修一の死によって）結婚が実現できなくなったのだから、もう「縁を切ろう」と言う。

吉也「すまねえが、この付き合いは今日までにしてもらいてえ」「お互いあの日、一回会っただけだ」
麻子「それはそうですけど…」
良介「ただの知り合いじゃありません、親戚になる寸前だったんです」
吉也「しかしならなかった。当人は死んでしまった、そうすりゃあなたがたに残るのは義理だけだ。一度会った俺たちに情が沸くわけがない。もう義理でいろいろしてもらうのは止めにしてもらいたいんだ」
良介「それは違います、浜口さん、それは違う」
吉也「はい、そうですか。はい、そうですか、と言うしかない。こっちには何もない。ありがとう。ありがとうと言うしかない。体育館をありがとう、三度の飯をありがとう、パンツもタオルもありがとう、暖房もありがとう、何しろこっちは何もない。……津波のせいだ、文句もいえねえ。」
良介「……不公平だべ。だから何か役に立ちたいんだ。気持ちの始末がつかねえんだ。…今日で終わりにしたいなんて言わないで下さい。お役に立ちたいんです。」

この場面では、津波被害に遭わなかった西郷家の父（良介）が、自分たちには何も被害がなかったことについて「不公平」だといい、「気持ちの始末がつかない」から役に立ちたいと主張してい

る。他方、被害に遭った浜口家側は「誰にも文句も言えない」状況下、一方的に支援の手を差し伸べられ、施しを受けることへの抵抗感を表明し、それゆえに「縁を切りたい」と言っている。こうした両者の主張の食い違いに表れているのは、支援をする側と支援を受ける側との関係の非対称性である。災害時に、被災した人々が他者（行政やボランティア等）から支援を受けることに「申し訳なさ」を感じ、次第に「負債感」を募らせていくことは、災害や被災地に関する先行研究でしばしば指摘されてきたところである（例えば、内尾太一、2018、成尾春輝・宮本匠、2021など）[12]。浜口家の祖父（吉也）や父（克己）が表明しているのは、まさにそうした「負債感」であり、その負債感ゆえに、子供同士の結婚の予定があるために知り合っただけの両家の関係を絶ちたいと言い出したのである。

ただし、この作品を見る者は、両家には、津波被害の有無によって被災地住民のあいだに生じた、ある意味で分かりやすい非対称性とは異なる問題も存在していることに気づく。それは両家の父親同士が中学時代に同級生であり、その事実が両家の縁談話を機に明らかになったにもかかわらず、二人のあいだに気まずい空気が存在することに表現されている。実はその気まずさは、二人が中学時代に「いじめっ子」と「いじめられっ子」の関係だったことに起因していることが明らかになっていく。良介は、他の町からの転校生で、その良介を克己たち地元っ子達がいじめたという過去があったのである。ドラマでは、二人は互いに一発ずつ殴り合うことで和解へと至るが、その場面は物語終盤におけるクライマックスとなっている。

しかし、二人のそうした過去にまつわるエピソードが作品内で重要な意味を持たせられていることと、ドラマの主題との関係は一見分かりにくい。実は、二人の関係は、被災の有無（や程度）に起因する同じ町内の住民同士の分断や軋轢だけでなく、被災地と非被災地とのあいだの温度差をも表現していると考えられる。かつて他の町からの転校生で「いじめられっ子」だった良介は、今は信用金庫の支店長という地元の「エリート」である。彼は、表向きには被災した地元の事業者たちに対して「金融を通して皆さんの役に立ちたい」と言う。しかし夫婦の会話では「誰にでもいい顔はできない」と言い、そのことを妻から「何てこと言うの？」「そんなこと外で言ったら、一生終わるよ、信用金庫の支店長がそんなこと言ったら終わるよ」と諌められる。こうしたことからも、良介が長じてもなお地元に完全には溶け込んではいないことが示唆されている。このように西郷家の父・良介は、同じ被災地内で被害を直接受けなかった住民であると同時に、非被災地の人々の立場を擬制的に仮託された人物として描かれていると考えられる。

④エンディング

ドラマは、西郷家と浜口家のメンバーが、津波で流された浜口家の家の跡地に集まるシーンでエンディングを迎える。浜口家の祖父・吉也は、震災後長く、この場所には一切近づこうとしなかった。吉也は、孫の光彦と二人で漁師の仕事を再開することが示唆されている。家族から半ば強制的に家のあった場所に連れてこられた吉也は「ずっと見たくなかった。来られなかった。許してくれ、修一、女房、嫁さん。元気でなあ」と言う。その吉也を西郷家の祖母・奈美がハグする。それを見た良介はその場から少し離れる。そして妻から「そんなにお母さんのハグ、見たくない？」と問われ、「馬鹿言え、大泣きしそうになった」と答える。こうして、幾つかの異なる次元で複雑な葛藤と対立を抱えていた両家の人々が和解し、それぞれが新しい一歩を踏み出していく。

このドラマの脚本家・山田太一は、本作の執筆動機について、震災後に数多くの震災関連のテレビドキュメンタリーを視聴したこととの関連で次のように説明している。

> やがて、というか、やっとというか、それらのドキュメンタリイから欠落しているものに気づいて来ました。今更、いい齢をしたドラマライターの告白として情けない限りですが、そしてごく当り前のことなのですが、ドキュメンタリイは映像になる事実や人物がいなくてはどうにもならないこと、そして撮影を許してくれた人のマイナスはなかなか描けないこと、見せたがらない内面には立入れないし、ましてや本人も気がついていない暗部などは描きようもない。そして、そこにこそのドラマの領域があるのではないかということ。われながら高校生にでもなったみたいですが、そんな当り前の役割を、あの途方もない津波の惨状をつきつけられて、ほとんど無意識に封印していたことに気づいたのでした。(13)

山田太一も言う通り、複雑な人間関係やその中での心の機微、とりわけ人々の心のなかにあるネガティブな側面を、ノンフィクションの分野である報道番組やドキュメンタリー番組が描き出すことは困難である。この作品は、そうしたまさに「ドキュメンタリーから欠落しているもの」を埋める役割を果たしたドラマだったと言える。

4－3.「故郷喪失」からの再起――『小さな神たちの祭り』（東北放送、2019年11月20日放送）

①作中の「場所」と「時間」

『小さな神たちの祭り』の主人公は、宮城県亘理町のイチゴ農家の長男・晃である。東京の大学に進学する予定だった晃が大学の下見のために東京に出掛けた日に震災が起きる。そして晃と一緒に中古 CD を探しに東京に行きたがっていたが結局行かなかった弟・航を含めた家族全員（両親、祖父母、弟）と愛犬が津波で犠牲になる。ドラマに登場する主要な場所は、晃の実家のあった亘理町のほか、晃が入学した大学と大学卒業後に2年務めた会社のある東京、東京を離れた晃が移り住んだ仙台である。

この作品の放送は、震災から約8年半後の2019年11月20日である。震災から2年後に放送された『ラジオ』（2013年3月26日）や、震災から3年後に放送された『時は立ちどまらない』（2014年2月22日）と比べると、長い時間が経過している。もちろんそのことを反映してもいるのだが、作品内に出てくる「時間」も、2011年3月11日（震災当日）から2019年8月以降までと長い。また登場する「時間」の数も11と、『ラジオ』の5、『時は立ちどまらない』の7と比べて多い。ただし、他の2作同様に、このドラマにおいても「時間」の流れは単線的である。震災当日から始まったドラマは、主人公・晃の大学時代、東京での社会人時代を経て、仙台に戻ってからの日々、そしてタクシーに乗って故郷の亘理町で亡くなったはずの家族や近所の人々との再会という不思議な体験をするまでを、時間の経過に従って描いている。

②主人公にとっての震災

ドラマの主人公・晃にとっての震災は、津波で家を流され、家族全員（両親、祖父母、弟）と愛犬を失うというショッキングな体験である。しかし晃が失ったのは実家と家族だけではない。晃

表4.『小さな神たちの祭り』（東北放送）の時間軸

物語上の時間	物語上の主な出来事
2011年3月11日 ↓	・イチゴ農家の長男・晃が東京の大学への下見に出発する前、「一緒に行きたい」という弟とのやりとり ・東京の大学の下見、友人と学食で食事中に震災発生 →家族全員（両親、祖父母、弟）、愛犬が津波で犠牲になる
2011年4月 ↓	・友人に声をかけられ「退学届け」を出しに来たと答える晃 ・なぜ自分だけ生き残ったのか、みんなと一緒に死にたかったと懊悩する晃
2011年6月 ↓	・晃は、父の親友・玄次と会い、玄次が父から預かっていたという通帳と印鑑を渡される
2015年1月 ↓	・晃は大学中退を思いとどまった ・卒業間近の晃。「4年経って、東京は何事もなかったように煌めいている」とつぶやく
2015年3月 ↓	・卒論の追い込み作業をする晃 ・4月からは、東京の新橋にある電気機器販売店の正社員として営業の仕事をする予定
2015年4月 ↓	・新入生歓迎の温泉旅行を断る晃。「みんなが冷たい水の中で死んだのに自分だけが温泉には浸かれない」というのが理由
2015年8月 ↓	・営業成績が全くあがらない晃 ・東京にやってきた玄次と会い、自分は元気だと伝える晃 ・玄次から亘理のイチゴをもらうが、「イチゴはケーキでも食べられない」と、わざと店に置いていく
2017年夏 ↓	・東京を離れる直前、アパートで故郷の友人と再会する晃 →仙台で仕事を探して暮らすと告げる晃 ・晃は仙台に移り、配送の仕事を始め、美結と知り合って付き合い始める
2018年夏 ↓	・晃と美結は、コンサートに行ったり、温泉旅行に行くが、晃は未だに温泉に入れない
2019年8月 ↓	・晃に美結が晃に別れを切り出す ・晃はタクシーに乗って実家へ、家族と再開する ・翌日、晃は美結を連れて再びタクシーに乗車、晃の家族、近所の人々と遭遇、交歓する。
不明	・晃が実家のイチゴ農家を再建することを決意、晃と美結は結婚する

は、強い愛着のあった地元・亘理町のコミュニティを失った喪失感にも苛まれている。作品冒頭、晃の声によるナレーションで、「俺の家は宮城県亘理町のイチゴ農家。亘理は仙台から車で40分くらいの海辺に広がる町で、うめえイチゴは全国的に有名だ」と、実家がイチゴ農家であり、地元がイチゴ栽培の盛んな地域であることが紹介される。晃は、震災当日に自分と一緒に東京に行きたがっていた弟を連れて行かず、結果的に弟・航が犠牲になってしまったことへの強い罪悪感に苦しめられるのだが、この罪悪感には、航が家業のイチゴ栽培を継ぐ予定でいたことが関係している。弟が家業を継いでくれるからこそ自分が東京の大学に進学することができたのに、震災で、その弟も、イチゴ農家であった実家も、そしてイチゴ栽培の盛んな地元のコミュニティも奪われてしまったからである。

このように晃にとっての震災は、家族とともに慣れ親しんだ故郷のコミュニティを失うという「故郷喪失」の体験である。そして、晃はその喪失感に苦しみ、震災から長い時間が経過しても立ち直ることができないままでいる人物として描かれている。仙台で働き始めた晃は、幼稚園の先生

をしている美結と知り合い、やがて付き合い始めるが簡単には立ち直れない。そして晃に寄り添おうとする美結に対しても、完全に心を開くことはなく、そのことが美結を苦しめる。陸前高田にある「漂流ポスト」[14]に亡くなった家族宛ての手紙を、晃と美結が投函に行った帰り道での二人の次のような会話は象徴的である。

美結：元気に前を向き始めましたのでご安心くださいって書いたの？
晃：美結という彼女がいつも支えてくれてますって
美結：でも毎日5人と小太郎ばかりを思ってますって？
晃：よく分かるな
美結：でもまじな話、本気で自分の幸せを掴むほうが家族は喜ぶんじゃない？
晃：だけっど、まだなかなか。
美結：意外と女々しいねえ、晃
晃：家族亡くさねえと分かんねえよ

『小さな神たちの祭り』
（東北放送、2019年11月20日）

③周囲・コミュニティとの関係性

ドラマは、晃が、亡くなったはずの家族や実家の近隣の人々と遭遇し、交歓する不思議な体験を経て心の再生を果たすという物語である。「家族全員を失い、生き残った自分だけが幸せにはなれない」と、いつまでも前を向こうとしない晃に業を煮やした美結が別れを告げた日、晃の前に亡くなったはずの祖父が運転するタクシーが現れる。タクシーは晃を実家のあった場所に連れて行く。到着すると津波で流されたはずの実家はもとのままで、亡くなった家族全員が晃の好物だったカレーを食べている。晃は翌日、今度は美結を連れてタクシーに乗って再び実家を訪問する。晃は弟の航から、亡くなった人達が楽しく過ごしていること、世の中は3.11直後のように熱に浮かされたような雰囲気は消えたが人々が震災の犠牲者のことを決して忘れているわけではないこと、晃のような生き残った人が元気でないと自分たちは死にきれないと感じていること、亡くなった人達は陸前高田の「漂流ポスト」から投函された自分たち宛ての手紙を読んだり、生き残った人達を見守ったりしていることなどを聞かされる。

ドラマでは集まった近所の子供達が、地元の神社が無くなってしまったために祭り（夏祭り、神社祭り、灯篭流し等）が行われていないことを晃に訴える。晃は、それならみんなで神輿を作って祭りをやろうと提案し、子供達や近所の人達が共同で祭りの準備を始める。そんな最中に、晃は父

親と次のような会話を交わす。

晃：オヤジ、急にいなくなったらから言えなかったけど、大学行かせてくれてサンキュウ
父：好きなように思いっきりやるっちゃ。そうすりゃ世の中ってところは結構面白れえんだ
晃：跡継がなくって、ゴメン
父：馬鹿野郎、優秀な航が継いでくれたほうがありがてえ。…晃、生き残ってくれてサンキュウな。命をつないでいくことが大事なっちゃ。生き残ったヤツがつないでいく、そういう務めがあるんだ。頼むな。
ナレーション（晃の声）：たしかに皆死んだ。だけっど、皆と一緒に暮らした日々はいつまでも死なねえ。

そんな会話のあと、晃と美結は子供達、近所の人達が神輿を担ぎ、灯篭を流すお祭りの様子を見送り、再びタクシーに乗って元の世界に生還する。こうした不思議な体験を経て、晃は前向きに生きていく姿勢を取り戻す。晃の「心の復興」にとって、亡くなった家族や近所の人々と再会し、彼らと交歓することが、重要な役割を果たしたのである。このように、このドラマは、死者（家族、コミュニティ）との関係性を確認することによって、生き残った者が救われるという物語となっている。[15]

④エンディング

ドラマは、晃が実家のイチゴ栽培の再建に向けて動き出すことを決意し、美結と結婚する場面でエンディングを迎える。震災によって「故郷喪失」を経験して生きていく気力を失った晃は、不思議な体験を通して「故郷」を恢復し、そのことで生きる力を取り戻す。このドラマのような震災に伴う「故郷喪失」を巡る物語の解釈においては、被災地や被災者を対象とした社会学的研究の成果が参考になる。例えば関礼子（2018）は、2012年12月に福島地方裁判所いわき支部に提訴された原発避難者39人による訴訟において「故郷（ふるさと）」の喪失がキーワードとなっていたことに注目する。訴訟において原告側は、避難者が避難生活に伴って受けた損害とは別に「コミュニティ（故郷）喪失」に基づく損害があると主張した。[16]ここでいう「故郷」とは何を指すのか。関は「故郷」について次のように説明している。

故郷はさまざまな社会的諸関係を結ぶ磁場であり、アイデンティティの源泉である。盆正月の帰省で親戚と語らい、同級生と旧交を温める。同窓会や郷友会でつながる。出身地が同じというだけで、人との距離が一気に縮まるように、「場所」を介して維持される関係性がある。人々の不断の営為によって維持される「場所」があり、「場所」には生活に根ざした「歴史」がある（関礼子2018：152 - 153）。

もとより原発事故の影響による故郷喪失と、津波災害による故郷喪失とは性格も意味合いも大きく異なる面がある。しかしこのドラマの主人公・晃が喪失したのは、関の言うような意味における「故郷」に他ならない。晃は、津波によって実家と家族を失っただけでなく、家族を含めた「社会

的諸関係の磁場」「アイデンティティの源泉」であった「故郷」を失ったからこそ生きる気力を失ってしまったのである。作品内で、晃と美結が、タクシーに乗って晃の「故郷」を訪ねたのが、震災から8年後にあたる2019年の8月13日という設定であることは偶然ではない。8月13日は「お盆」である。言うまでもなく「お盆」は、先祖の霊があの世から帰ってきて、親族・縁者とともにひとときを過ごし、再びあの世に戻っていくという古来の行事である。すなわち、晃が再会したのは、あの世からお盆に帰ってきた家族や近所の人達の霊だったと考えることができる。祭りの準備をする近所の子供達の様子を見ながら、晃は「この子たちが神なんだと思った」とつぶやく。そして先に挙げた父との会話の末尾での「たしかに皆死んだ。だけっど、皆と一緒に暮らした日々はいつまでも死なねえ。」という晃の語りに象徴されるように、晃は不思議な体験を通じて自らの帰属先である「故郷」を再確認する。[17] そして、亡くなった人達の分まで自分が頑張って生きていかなければならないと認識する。晃が美結と結婚し、実家のイチゴ農家を再建しようと決意をするというエンディングには、そのような意味が込められていると言える。

5．考察

本稿で分析対象とした3本のドラマは津波で甚大な被害を受けた被災地を舞台とし、そこに生きる被災者や関係者の震災後の姿を描いたものであった。分析で明らかになったのは、3作品がいずれもドラマだからこそ描くことのできるテーマ、報道番組やドキュメンタリー番組のような「ノンフィクション」のジャンルでは扱うことの難しいテーマを正面から扱っていたということである。

第一に、3作品はそれぞれ被災者の「心の復興」(『ラジオ』)、被災者内の、及び被災地と非被災地のあいだの「分断・葛藤」や「和解」(『時は立ちどまらない』)、そして「故郷喪失」からの再起(『小さな神たちの祭り』）がテーマとなっていた。これらのテーマは、いずれも被災地の人々の内面に関わるものであり、彼らの心の機微を深く細やかに描くことによってこそ説得力をもってリアルに伝えることが可能となる。報道番組やドキュメンタリー番組は、基本的に起きている「事実」を「事実」として扱うという特性があるがゆえに、人間の内面の問題に深く立ち入ることを不得手としている。実際、報道番組やドキュメンタリー番組が主として扱ってきたのは、震災による被害の実相、避難に関わる諸状況、町やインフラの復旧・復興、復興に関わる社会的・政策的課題、原発事故や廃炉に関わる様々な動きといった諸テーマであった。「ハード」よりも「ソフト」、政治・経済や社会の次元よりも「人間」の次元を扱うことを得意とするドラマは、震災をテーマにする場合においてもその特性を発揮しているということができる。

また第二に、3作品はいずれも被災地の人々の内面について、ネガティブな側面も含めて描き出している。報道番組やドキュメンタリー番組の場合、人間を中心に描く場合においても、実在の人物を取材・撮影対象とするがゆえに、その人物のネガティブな側面にフォーカスすることは難しい。実際、報道番組やドキュメンタリー番組は、被災地の復興に向けて尽力するリーダー的な人物や、日常生活の再生に前向きに取り組みながら生きている市井の人々の姿などを多く伝えてきたが、時間が経過しても前向きな姿勢を取り戻せない人、震災をきっかけとして心身両面での失調や深刻なトラブルを抱えた人などの姿は、（実際には相当数存在しているにもかかわらず）必ずしも十分に映し出してきたとは言えない。もちろん、そうした問題を扱う番組は一定程度放送されてきたが、その多くは、被災者における「分断・葛藤」や孤独死、自殺などの「震災関連死」といった

諸問題を社会的に解決されるべき「問題」としては扱っても、それぞれの当事者の内面に深く分け入るような仕方でその実相に迫ろうとするものではなかった。この点に関して、『時は立ちどまらない』の脚本家・山田太一は次のように語っている。

> （ドキュメンタリーにおいては）津波に関してある人物を描くときに、その人物が嫌な奴だとは描けませんよね。それから怠け者だとかも描けません。その人が映っちゃうわけですから、そして名前も出てしまうわけですから、ですからいろんな事柄でも何でもマイナスの部分には立ち入れないんですよね、ドキュメンタリーというのは、特にテレビは傷つけちゃいけないという縛りがありますから。ですからたっぷりと暗闇があるんですよね、津波には。だけどドキュメンタリーで暗闇を描くということはものすごく難しい。それこそ僕はドラマが描く領域だろうと言う風に思いました。[18]

実際、『ラジオ』の主人公・某が仮設住宅で引きこもりを続ける姿、『時は立ちどまらない』に登場する二つの家族の父親同士の確執、『小さな神たちの祭り』の主人公・晃が恋人にもなかなか心を開こうとしない姿など、3作品はそれぞれ被災者や関係者のネガティブな姿や心の動きをリアルに描いている。このように、震災に関わる人間の「ネガティブな側面」を正面から描くことも、ドラマだからこそ可能だったということができる。

第三に、上記の二つの点と深く関わるが、実際には存在しないはずの現象、科学的には説明の難しい経験を描くことも、フィクションとしてのドラマは得意としている。本稿が対象とした3作品のなかでは、『小さな神たちの祭り』がその代表例である。『小さな神たちの祭り』では、主人公・晃が、津波で流されて失われたはずの故郷の実家のもとを訪ね、亡くなった家族や近所の人々（＝死者）と再会し交歓するシーンがある。晃に生きる力を回復させた経験を描いたことのシーンは、物語上のクライマックスでもある。このように震災の犠牲者が登場人物あるいは語り手となって現われたり、「死者との対話」がモチーフとなったりケースは、同じフィクションの分野である文学作品においても多く見られる（小森陽一2014、木村朗子2018）。また亡くなった人と再会したり、その気配を感じたりするといった「心霊体験」については、実際の被災地では数多くの証言が存在しており、そうした証言の収集や宗教学の観点からの研究なども行われている（高橋原・堀江宗正2021、奥野修司2017、金菱清2021など）。こうしたテーマについても報道番組やドキュメンタリー番組で扱うことは容易ではない。ドキュメンタリー番組ではこのテーマを正面から取り上げた『NHK スペシャル 亡き人との“再会”～被災地 三度目の夏に』（NHK、2013年8月23日）があるが、ごく少数の例外である。ドラマでは『小さな神たちの祭り』のほかに、2021年3月6に放送された『宮城発地域ドラマ ペペロンチーノ』にも幽霊が登場している。経営していたレストランを失って自暴自棄となっていた主人公が再起に向けて動き出す物語であるが、作品内では津波で亡くなったはずの妻が、ほぼ全編にわたって主人公にだけ見える幽霊として登場する。このように死者を実在の人物のように登場させて、その姿を描くというのは「フィクション」としてのドラマだからこそ可能な表現である。

最後に、本稿が分析対象としたのは津波の被災地を舞台とした3作品であるが、冒頭でも述べたように「震災後テレビドラマ」は数多く放送されており、そのテーマや舞台、ジャンルも多様であ

る。他の作品についても分析対象としながら、震災後テレビドラマが何をどう描いてきたのか、視聴者にどのように受容されてきたのか等についてさらに検討していくことが今後の課題となる。

謝辞

本論文は、公益財団法人放送文化基金の助成（2021年度）を受けた「映像アーカイブを用いた震災関連報道10年の時系列分析」の研究成果である。

注

（1）「震災後文学」においても事情は同じで、木村朗子は「震災後文学」について「震災後に震災を扱って書かれたものだけをさすのではなくて、震災後の文学状況全体を指す」としている（木村朗子2018：26）。また飯田一史も「震災後文学」を震災に直接関わるテーマを扱ったものだけでなく、より幅広いテーマを扱った文学作品、あるいはそうした作品をめぐる批評や言論状況などを含めて定義している（飯田一史2017：9）。このように「震災後文学」を広く「文学状況全体」として定義するならば、それに該当する作品数を把握すること自体がそもそも困難となる。

（2）『Kesennuma Voices.』は2018年の『Kesennuma Voices.7』まで特別編を含めると7本の続編が制作されている。

（3）河北新報を舞台にした『明日をあきらめない…がれきの中の新聞社～河北新報のいちばん長い日～』（テレビ東京、2012年3月4日）も類似のドキュメンタリードラマである。

（4）ここに挙げたもの以外を含めた3作品の受賞歴は下記の通りである。『特集ドラマ ラジオ』（NHK）は、第68回文化庁芸術祭「テレビドラマ部門」大賞、第50回ギャラクシー賞「テレビ部門」優秀賞、国際ドラマフェスティバル in 国際ドラマフェスティバル in TOKYO 2013「東京ドラマアウォード 単発ドラマ部門」優秀賞、第16回シナリオ作家協会「菊島隆三賞」、シカゴ国際映画祭テレビ賞「長編テレビ映画部門」金賞、ドイツ ワールドメディアフェスティバル「エンターテインメントその他部門」金賞の各賞を受賞している。また『時は立ち止まらない』（テレビ朝日）は、第51回（2013年）ギャラクシー賞テレビ部門優秀賞、放送人グランプリ2014グランプリ、第40回放送文化基金賞・テレビドラマ番組最優秀賞（番組部門）、平成26年日本民間放送連盟賞・テレビドラマ番組優秀賞（番組部門）、MIPCOM BUYERS'AWARD for Japanese Drama・グランプリ、2014年東京ドラマアウォード・作品賞・グランプリ（単発ドラマ部門）、第19回アジア・テレビジョン賞2014・最優秀賞（単発ドラマ・テレビ映画番組部門）、2014年度芸術祭賞大賞（テレビ・ドラマ部門）の各賞を受賞している。そして、『小さな神たちの祭り』（東北放送）は、第74回文化庁芸術祭「テレビドラマ部門」優秀賞、2020年日本民間放送連盟「テレビドラマ番組部門」優秀賞、第25回アジアテレビジョンアワード「単発ドラマ・テレビムービー部門」で最優秀賞の各賞を受賞している。

（5）「NHK スクエア」におけるドラマ紹介（あらすじ）の記述から抜粋。https://www.nhk-ep.com/products/detail/h19707AA（2023年1月3日最終閲覧）

（6）DVD パッケージにおけるストーリー紹介の記述をもとに作成。

（7）BS-TBS の HP におけるストーリー紹介の記述をもとに作成。https://bs.tbs.co.jp/drama/tbc60chiisanakamitachinoinori/（2023年1月3日最終閲覧）

（8）女川町「震災復興のあゆみ」参照、https://www.town.onagawa.miyagi.jp/archive/ayumi/ayumi.html

（2023年1月6日最終閲覧）

（９）　女川さいがい FM は2011年4月21日開局、2016年3月29日に閉局した臨時災害放送局で、閉局後、現在は地域 FM 局「オナガワエフエム」として引き継がれている。詳細は同局のホームページを参照。http://onagawafm.jp/（2023年1月6日最終閲覧）

（10）　ドラマ内ではこの「女川どうしよう」という商品の発案者が某であることが示唆されている。

（11）　NHK 広報資料（2013年12月25日）参照。https://www.nhk.or.jp/pr/keiei/otherpress/pdf/20131225.pdf（2023年1月6日最終閲覧）

（12）　他方で、福島の原発事故に伴う広域避難では、避難者が国や東電から補償金や見舞金を受給しているゆえに、受け入れ先自治体の住民との間に分断（差別や排除）が生まれたり、補償金を受給している避難指示区域からの避難者と、補償金等を受給していない自主避難者とのあいだの分断（軋轢や葛藤）が問題化された。

（13）　山田太一「三年たってやっとでした」『読む楽しむ 放送文化基金賞特集』公益財団法人放送文化基金 HP、https://www.hbf.or.jp/magazine/article/hbf2014_vol2（2023年1月22日最終閲覧）

（14）　陸前高田市に実在する。震災で亡くしてしまった大切な人に宛てて手紙を書いて思いを伝えるために地元の住民によって2014年7月設置された。

（15）『小さな神たちの祭り』の脚本家、内館牧子はこの作品の執筆動機について「私の周りにも震災で亡くなった方がいて、でもどこかで生きているような気がしてならない。こっちから見えないけど、あっちで元気にしているんじゃないか。そのあっち側を描けないか、と。本当に荒唐無稽な話だとわかっているんですけど、プロデューサーや監督が OK してくださり、順調に動き出して本を作りました。ご覧のようにいいキャスティングに恵まれまして、本当に幸せに思います。」と説明している。ORICON NEWS「千葉雄大、サンドウィッチマンら、震災ドラマへの思い語る」（2019-09-05）、https://www.oricon.co.jp/news/2143770/full/（2023年1月17日最終閲覧）

（16）　避難者訴訟は、①避難指示がなされている段階だけでなく、避難指示解除後に帰還しないと選択した人にとっても故郷が喪失されている、②避難指示解除後に帰還した人にとっても、「故郷の変質・変容による精神的損害」が発生しているとした。従って、避難指示が解除されても、帰らない人には故郷喪失の慰謝料が、帰った人には故郷変質・変容に対する慰謝料が支払われるべきであるとした（関礼子2018：151）。

（17）　関礼子（2018）は「故郷」が「時間の記憶」を持つものだとし次のように言っている。「時間についての記憶は、家族や友人、近隣や親戚、職場といった共時的な関係性だけでなく、先祖にまで遡って通時的な関係性のなかで人々の存在を保証し、証明する、集合的な記憶である。」（関礼子2018：157）

（18）　山田太一「戦後70年 語る・問う」日本記者クラブ会見（2014年11月14日）、https://www.youtube.com/watch?v=LJhOXaO9fzo&list=UU_iMvY293APrYBx0CJReIVw（2023年1月22日最終閲覧）

文献

古澤健・米倉律（2022）「震災関連ドキュメンタリーの10年―被災地・被災者の表象とテーマに関する内容分析を中心に」『ジャーナリズム＆メディア』第17・18号

本多環（2016）「東日本大震災で被災した子どもたちへの支援の在り方」『学術の動向』21巻1号

飯田一史（2017）「序論 はじめに」限界研編『東日本大震災後文学論』南雲堂

金菱清2021『私の夢まで、会いに来てくれた――3.11亡き人とのそれから』朝日新聞出版
木村朗子（2013）『震災後文学論 あたらしい日本文学のために』青土社
木村朗子（2018）『その後の震災後文学論』青土社
小森陽一（2014）『死者の声、生者の言葉 文学で問う原発の日本』新日本出版
前田正治（2021）「原発災害が与えたメンタルヘルスへの長期的影響―発災後の10年を俯瞰する」『学術の動向』26巻3号
望月美希（2020）『震災復興と生きがいの社会学：〈私的なる問題〉から捉える地域社会のこれから』御茶ノ水書房
成尾春輝・宮本匠（2021）「被災者が抱える申し訳なさによる苦しみと普遍的連帯の可能性について―平成30年7月豪雨で被災した広島県坂町の被災者用公営住宅入居者の声から―」『日本災害復興学会論文集』No.18
奥野修司2017『魂でもいいから、そばにいて――3.11後の霊的体験を聞く』新潮社
関礼子（2018）「故郷喪失から故郷剥奪の被害論へ」関礼子編著『被災と避難の社会学』東信堂
関嘉寛（2016）「東日本大震災における復興とボランティア―中心－周辺の分断から考える―」『フォーラム現代社会学』15巻
高橋原・堀江宗正（2021）『死者の力 津波被災地「霊的体験」の死生学』岩波書店
高塚雄介（2012）「震災ストレス～ PTSD 化を防ぐには」『ストレス科学研究』27巻
谷正名・水原俊博・米倉律・小林千菜美（2022）「震災テレビ放送・報道10年の全体像」『ジャーナリズム＆メディア』第17・18号
内尾太一（2018）『復興と尊厳 震災後を生きる南三陸町の軌跡』，東京大学出版会
除本理史（2015）「福島原発事故における「不均等な復興」―復興政策と被害者の「分断」について―」『環境経済・政策研究』Vol.8, No2.
山崎真帆（2020）「復興過程における「被災者」の自己認識に関する一考察―仮設住宅居住者と非津波被災者の語りに基づく「被災者」の構造と輪郭の分析から―」『日本災害復興学会論文集』No.16, 2020.10
米倉律（2022）「震災を描くフィクションは何を問うてきたか－東日本大震災後の文学をめぐる研究、評論の動向を中心に」『ジャーナリズム＆メディア』19号